

# あそ 3

2025



撮影・不寝

昏 蚓 龜 蛇

須賀敏子

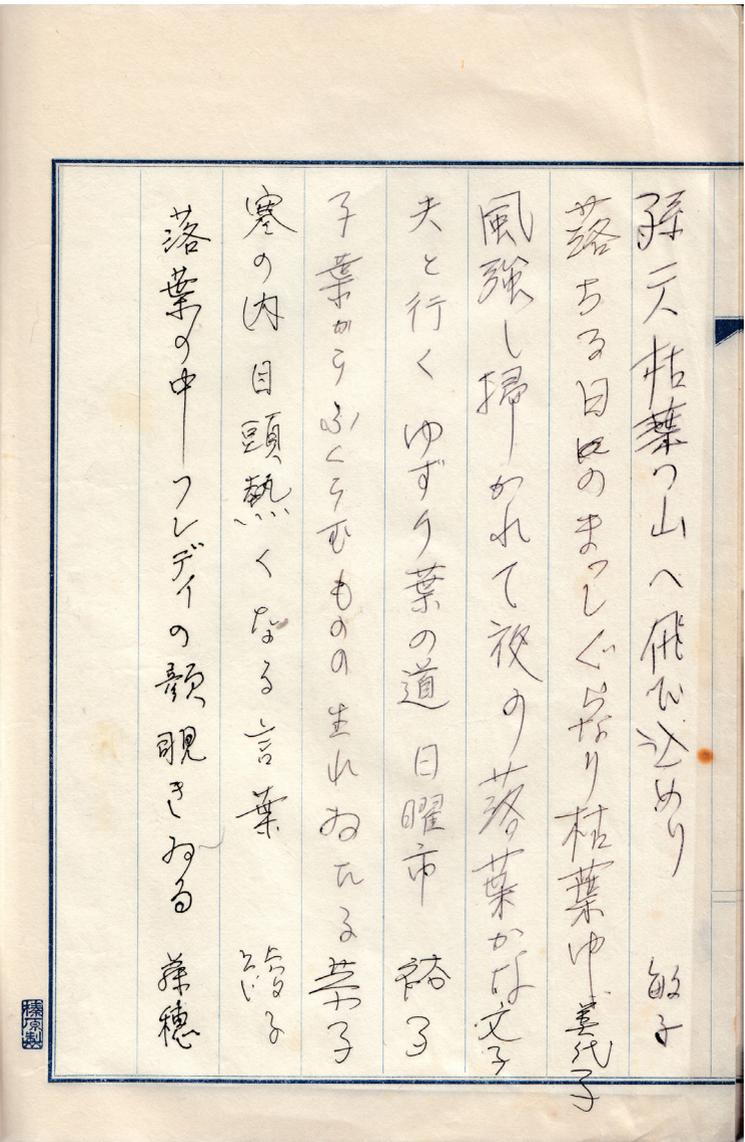
吉成美代子

続木文子

斎藤裕子

佐藤恭子

斧田綾子・田中藤穂



三月集

坐・誹

佐藤 竹僊

庭さきを夜な夜なとほる冬の風

明日は雪強しとテレビの人が云ふ

春一番庭の目高が飛ばされさう

きさらぎの枝のさきざきまで光

きさらぎの細枝みつみつみづみづと

バス来るまでさがすよつ葉の苜蓿

春の雲梢欠けたる樹に至る

春待つ木小鳥が止まるとこ無數



お正月

都築繁子

高階に住みて玄關注連飾り  
スカイツリーの左に拝す初日の出  
ふるさとの山みな低し賀状来る  
句会への誘ひの賀状空青し  
子等来るお節の卓の楽しげに  
蠟梅や整形外来混み合える  
車椅子の初体験や梅の花

芽立ち

長崎桂子

年新た今朝かぜぬくしほほゑまし  
氏神様詣でに平和祈るのみ  
新年会おみくじは中吉うれし  
寒の入り総身のかたくなるごとし  
止んでまた降り出してをり吹雪かな  
庭の木木今朝より雪をいただけり  
今朝は雪部屋は温度をさげてをり  
年新たお箸いただくありがたき  
燈籠を背に草の花芽立ちけり



凍星

森なほ子

極月の坂ふりむけば八分目  
日輪を時計代はりの師走かな  
暮れ早し相撲終はりて月曜日  
重たげにバス発車せり冬紅葉  
横断歩道歩いて渡る石叩き  
新郎を終へし青年革ジャンパー  
凍星と入れ忘れたる干し物と  
朝よりも夜のニュースに雪増えて  
初詣五人一列鈴鳴らす  
七草のセツトの蕪の丸々と

一月

赤座典子

寒雲の角髪みづらの富士を装へり  
しゃこばの白文鳥の白淑気かな  
初詣願ふ優しさ暖かさ  
お節よりフライドチキンとお年玉  
これはなに葩餅を訝しむ

毎日が追悼の日々去年今年



あたはり

秋川 泉

おだやかに猫と語らふ三ヶ日

ほめられて檸檬をうかべ鴨の鍋

冬晴れやみわたす限り野も山も

仏滅の初詣さけごみ拾ひ

一月の地震目も耳もかたまりて聴く

珠洲焼を「あたはり」として冬の海

奥能登に幸のあれかし吹雪く海

昭和百年

七郎衛門吉保

初読みの俳句年鑑知の迷路

賀状なく干支との縁の遠くなり

正月は枯露柿のある八十年

塩沢に雪と牧之の二百年

冬はfuyu 訓令式かへボン式

嘘話それも可とする凍つの国

隣国も戒厳令とか冬衣

インバウンドで食事難民冬景色

ウイルスかそれとも花粉嚏かな

昼歌謡昭和百年温めけり



昭和百年

篠田純子

あけまして昭和百年ちやんちやんこ

本籍は芝日陰町雪をんな

藪柑子の実古井戸の蓋朽ちて

寒暁や廣重ブルーを押し上げり

猿曳きへ耳打ち猿は耳つけて

どうしても止まらぬフェイクアラート冴ゆ

冴返るウイルス感染偽警告

五七五にメール端折りて初仕事



路傍

篠田大佳

御旅所に初詣神酒は白雪

鳥瞰に城東地区の二日かな

壁染みの幻覚楽し冬の朝

目はつぶら銀座の朝の寒鴉

小正月異言に娘を諭す母

異言以てむくれる娘小正月

それぞれに母語の異なる白き息

元気出せビルの花壇の冬さうび

路傍の手袋は気づけば消えてゐた



## 月の光

須賀敏子

年新たな月の光も新たななる  
寒晴や秩父山嶺遙かなり  
あの頃は夜を飛ばして霧氷かな  
初電車舎人ライナー大師西  
初場所や巴戦にて綱取りに  
お向かいの主人退院梅開く  
締切や葛湯ふうふう俳句まだ



## 一月号作品より

赤座典子・篠田大佳・佐藤喜孝

息長く真夜の秋風庭とほる

佐藤竹僊

「息長く」という言葉を核として、作者の呼吸、秋風の止まない音、秋風のうすら寒い感覚、秋の夜の頭が冴えた感覚、そういったイメージたちが相関的に行ったり来たりを繰り返します。イメージの往復に、風の流れを感じます。(大佳)

秋の月そろそろ窓を出てゆきさう

佐藤竹僊

季語としての「秋の月」は『角川俳句大歳時記』には「月」の傍題として載っていましたが、産調出版発行の『読本・俳句歳時記』にはありませんでした。作者は月を季節として強調しながらも、その終わりゆく様を少し距離を置いて観察している。作者の独特な表現を想像させていただきました。(典子)

北風を近ごろ丸き背で受ける

篠田大佳

大佳さんの句には常々 世代の違い、若さ、個性等 良い意味で ハツとさせられております。それが 今回 「丸き背」とは！ 北風にもその他にも背筋を伸ばして下さい。小気味好い句を作り続けて下さい。(典子)

枯蓮のかさわさと鳴る上野かな

篠田大佳

「かき」は、嵩のことであらう。作者は「かさわさ」と枯蓮が揺れる音のオノマトペにこの嵩を組み込んで終った。「枯蓮の嵩かさわさと鳴る」と「かき」は私の中で変な働きをする。変な働きでなくおもしろいといった方が適切。作者にとつて不忍池は上野を象徴する場所なのだらう。(喜孝)

新米を少し多めに炊きあげる

須賀敏子

この国に生きていて良かったと思うのは、「食」についてです。なかでも毎日のお米に執着していて、新米ではいつも我が家も大騒ぎをします。敏子さんの句は、我が家の事のように楽しかったです。今話題の備蓄米も美味しいうちに食べて欲しかったことでしょう。(典子)

妹よブロッコリーの緑濃し

須賀敏子

きつとこのブロッコリーは妹さんが作られたもの。立派な挨拶句、または贈答句になつてゐる。この句やうに心情を秘め削りに削つた敏子作品を読める幸をわたしは感じてゐる。わたしの旧作に「ひまはりのうしろにぬますいもうとは」がある。わたしには妹はゐない。戸籍外にもゐない。妹が欲しくて作つたやうだ。掲句の「妹」は同じ血が流れてゐる温かい妹さんである。「濃し」にすべてを託した佳品。(喜孝)

展示さる懸崖菊のみな蕾

都築繁子

菊花展の懸崖は訪れた時はまだ蕾のままでした。花の咲いている菊を纏つた懸崖も豪華ですが、蕾が散りばめられているのも一興と詠まれました。繁子さんの様々などころでの句には本当に楽しませていただきました。暫く療養なさると伺いました。復帰をお待ちしております。(典子)

繰り返す鴨の航跡冬紅葉

都築繁子

作者はベンチに坐り鴨の泳ぐ水面をゆつたりと眺めてゐる。鴨の航跡は消えてはまた生じる。鴨の動きを楽しむと云ふより、その水面に生じる航跡を愉しまれてゐる。ここにこの句の佳さがある。水面を囲む冬紅葉も印象的である。

いつも見慣れてゐる景も視点を變へることにより楽しみ方が増えるものだ。(喜孝)

冬はじめ和紅茶にしばし憩ひをり

長崎桂子

和紅茶は、カフェインも少なくリラックス効果も抜群という効能があり、ちよつとしたブームになつてゐるようです。季語の冬はじめが、穏やかさを感じられ、ぴったりです。ほっこりとした気分を分けていただきました。(典子)

店頭のはしりの野菜冬きたり

長崎桂子

「店頭」といふことでスーパーの野菜売場ではなく、町の八百屋さんのこと。冷蔵庫の普及するまで毎日買物籠を提げて出かけるのが主婦の日常。桂子さん、買物に出かけたをり、店先に並べられた野菜を見て「冬が来た」と知った。今はトマトも胡瓜も……も、一年を通して店にある。そんな中に桂子さんの目にした冬のはしりの野菜はなんであつたのだらう。わたしも春先路の臺やうるいなど見かけると手を出したくなるが料理はできないので眼福だとおもひ帰る。(喜孝)

乳飲み子を抱く埴輪や冬温し

森なほ子

博物館で縄文時代の展示に行つてきたという句でしょうか。埴輪のモチーフは、根源的で普遍的なモチーフを描いています。乳飲み子を抱く母の埴輪に対する温かな目線、そして、作品を保護する博物館の空調の温かさが伝わってきます。子どもを抱くことの普遍性とありがたみを読みます。(大佳)

この服も派手になりしと秋扇

森なほ子

「秋扇」と読めば「この服」は着物ではとおもつたが、そこは拘ることではない。ここの「秋扇」はある程度歳を重ねた人物を描くための小道具でもある。それとともに「秋扇」はこの句を見事に収め、お洒落な作品に仕上げている。(喜孝)

退院は栄えある帰還冬苺

赤座典子

入院という日々は命を脅かす病との戦いです。それを戦い通して、勝利を手にした作者です。退院の日に帰還した作者の勇ましい気分添えられた冬苺。寒い季節に、ささやかなながら力強い赤色の実をつける姿に、勝利の感情が重なります。(大佳)

越前の降りず降りみ冬菜畑

赤座典子

今この句を読み、今ニュースでこの地の雪害を知る。例年とは桁違ひな雪量ときく。そのことを念頭に置いて読むとまた別な趣をおぼえる。はつきりとしな天候の下にひるがる「冬菜畑」、雪に変わる前の越前の景が静かに詠まれてゐる。地名の生かされた作品。(喜孝)

野良猫の遊びあきたる放屁虫

秋川 泉

放屁虫の連作がいくつか並んでいます。その一つを。猫の獠猛さ、理不尽さから解放された放屁虫の安堵と、理不尽な野良猫の少し満足げな表情を思い浮かべます。小さな命を弄ぶ猫の世界、命から逃げ切った虫の世界、それを見ている人の世界で、捉え方が変わる面白さがあります。

(大佳)

§

猫は動いてゐるものに非常に興味を示す。作品の中の野良猫は放屁虫にあきるほど戯れてゐる。

随分と長い刻、猫と放屁虫のあそびを作者も興味を示したやうだ。二匹と一人のたのしい？ひとときだが放屁虫はたまつたものではない。放屁虫はへつぴりむし、秋の季語。俳人はこんな虫にも季語として扱つてゐる。俳人はなかなかクセ者である。

もう一句「もうやめた」立ち上がる子に放屁虫を同時発表されてゐた。おなじやうな状況だが主役が人と猫と違ふ。人の方はすこし淫靡である。(喜孝)

我が家も二季になりけり忍冬忌

七郎衛門吉保

夏から突然冬になつた世の中、作者の身边でも季節の急激な変化が感じられたやうです。忍冬忌は石田波郷の忌日、初冬から冬が深まっていく頃です。かつての気候の機微も感じられないほど、ワイルドになつた地球です。(大佳)

踏切は故郷の音石路の花

七郎衛門吉保

踏切の音は全国一律なのだらうか。「カンカンカン」がわたしの踏切の音。その音を聞くと故郷の風景を想起するといふ。故郷といふと踏切の周辺は田野が拡がつてゐなければならぬ。町中の踏切ではない。しかし、今はない町中の踏切をおもつてのことかもしれない。

わたしは図書館への通ひ路に踏切がある。ひとつは人と自転車しか通れない。遠回りすると自動車も通る大きな踏切。その日の気分で使い分けてゐる。七郎衛門さんと同じくわたしも踏切を

通るときながしかの感興を覚える。生活の中に踏切が現れたのはここ数年のことである。(喜孝)

すずめ瓜赤くなる頃嫁ぎたる

篠田純子

作者の結婚した季節が詠まれています。若者の頬の赤さと、雀瓜の実の赤さが重なり、初々しさを感じます。雀瓜の情緒とは関係ないですが、実の早熟に、作者の歩んできた日々を色々と考えてしまいます。(大佳)

S

掲句のなつかしい世界に浸つてゐたらある唄が浮んだ。スマホに口遊んで調べて貰つたら中国語で謡はれる「乡村小姑娘」といふ題で跳ねるやうなリズムで歌はれてゐた。わたしの口遊みは中国語に聞こえたやうだ。歌中に「迎春花」がある。「ゲイシュンカ」ではなく中国語で歌はれると花の気分が出た。久しぶりに中国語の美しさを思ひ出した。

地に足の着いた嫁入りに色づく頃の「すずめ瓜」。なんともふさはしい。(喜孝)

里神楽翁の髭の靡き癖

篠田純子

いつの世より使はれてゐたかとおもはれる里神楽の翁面。面の時代感を「髭の靡き癖」で見事に表現されてゐると感じ入つた。しかしこれは翁面について無知なわたしの鑑賞。翁面の顎髭は造られたときから靡いてゐるのかも知れぬが、「癖」には時間が必要であるとおもつた。(喜孝)

沓冠くつ かぶり

篠田純子

都立青山高校の、生涯学習講座に、「言葉遊び」の講義があり、「沓冠」を学んだ。兼好法師と頼阿法師は、鎌倉時代の和歌四天王に数えられている歌人である。沓冠は、和歌や俳句の折句のようなものだが、下方へと上方へと往復する。

兼好法師から頼阿法師へ

よ 夜も涼し（よも涼し） し  
ね 寢覚の仮庵（ねざめのかりほ）ほ  
た 手枕も（たまくらも） も  
ま 真袖も秋に（まさでもあきに）に  
へ 隔てなき風（へだてなきかぜ）ぜ

よねたまへ 米給へ （お米ください）  
ぜにもほし 銭も欲し （お金もほしい）

頼阿法師から兼好法師への返事

よ 夜も憂し （よるもうし） し  
ね 妬たくわが背子（ねたくわがせこ） こ  
は 果ては来ず （はてはこず） す  
な なほざりにだに（なおざりにだに）に  
し しばし訪ひませ（しばしとひませ）ぜ

よねはなし 米は無し （お米はありません）  
ぜにすこし 銭少し （お金は少しあります）

兼好頼阿ふたりとも、食べる米も、買う金にも事欠いている。それなのに頼阿は、兼好に金を融通しようとしている。良い人すぎる頼阿に感動した。

さすが後世に名を残す歌人は、ダイレクトに用件を語らず、沓冠と言う手法で用件を伝え合っていて見事なことだと思った。洒落ていると思った。

俳句と着物

第三話 襲 その二 七郎衛門吉保

我が家のお雛様は、昭和四十六年に長女誕生を祝って、叔母に当たる筆者の妹が、人形教室に通い手造りしたものである。ここ数年はコロナ禍などのこともあり、飾ることを控えていた。しかし持ち主が、長女から孫娘への代替わりの時期、人形作者が元氣なうちに、などと重なつて久しぶりの飾り付けとなった。木目込み雛の十五人揃い、総七段のお雛様飾りである。

人形とは言へ、そこは着物の世界であり、その着物は襲の世界を体現している。親王女雛は春の、親王男雛は冬の、三人官女は春の、衛士は夏の、そして五人囃子は秋の襲を装い、十五体の人形の衣によって、四季を歌っているようにも見える。

更にこの襲は、お道具の類にも見られる。その先には食べ物の世界まで連なっている。菱台と三宝、これに載せるのは菱餅と雛あられ。この二つは白・紅・緑の三色。春の襲には、紅梅または桜の襲、柳の襲、桜萌黄の襲がある。いずれも白（生絹）との組み合わせであり、菱

餅と花あられの色に。 角川俳句大歳時記から、菱餅と雛あられの色を、詠んだ句を繕ってみる。

菱餅の淡々と色重ねけり  
色あはきいびつを愛すひなあられ

河野邦子  
大高 翔

『あを』 四月号分として「平安の雅の襲雛の餅」を投句した。



# 焔収集

サバンナも秋の大地も食卓だ 佐藤 竹僊

茶の花や住まひも人も古りにけり 須賀敏子

鬼柚子の黄色く重く育ちけり

ゆっくりと進む一団鴨の群 都築繁子

聖樹の灯青と空色眩しめる

音なき雨に風おこり氷雨なり 長崎桂子

窓あけてかすかに聞くや除夜の鐘

バス停のバスに追ひ付く時雨かな 森なほ子

ねんねこに育てし子らの皆五十路

刻々と針葉樹林雪像に 赤座典子

残る柿ひとつひとつに丸き雪  
しやりしやりと乳歯でかじる冬りんご  
そして今夫と並んで日向ぼこ  
口争ふメジロホオジロ冬の庭  
駅伝を待つ街道の冬堇  
ひざまづき巫女稲刈るや忌鎌に  
噛み合はぬ一途と不実近松忌  
天気雨抜けて千代田のもみぢかな  
警棒を伸ばす警官十二月

秋川 泉  
七郎衛門吉保  
篠田純子  
篠田大佳

喜孝抄



季語あれこれ 「沈丁花・ミモザ・ほか」

「へ梅は咲いたか桜はまだかいな」と春を知らせる花は視覚から。しつかり嗅覚で春を告げるといへば沈丁花、秋の金木犀と芳香では双璧かも。「沈丁花香の無き花とならびをり」である。

沈丁花考え明るくなる夜道 松村美智子  
Eメール沈丁開花伝へたり 須賀敏子  
寸の身となり沈丁の根にまろぶ 渡辺友七  
沈丁花ふつととまりし水の上 佐藤恭子  
沈丁花向ひ合ひたる申告書 赤座典子  
去る人の良きことばかり沈丁花 山莊慶子  
沈丁花上から落ちてくるものなあに 堀内一郎  
手をつなぐ宵のふたりや沈丁花 赤座典子  
沈丁花会ひたくて入る細き道 長崎桂子  
沈丁花香の無き花とならびをり 赤座典子

沈丁花ブロック塀のあちら側 須賀敏子  
わが家より他の沈丁たくましく 堀内一郎  
息大きく吸ひ込みし道沈丁花 齊藤裕子  
まづ白が香りをたてり沈丁花 遠藤 実  
沈丁花能面かすかに笑みてをり 遠藤 実  
肉厚の益子の器沈丁花 遠藤 実  
肉じやがのほつこり炊けて沈丁花 齊藤裕子  
沈丁花相合傘に肩濡らす 早崎泰江  
あと一句ただよひきたる沈丁花 堀内一郎  
沈丁花わが家訪ねず帰りきし 井上石動  
しなやかな雨の吾が町沈丁花 井上石動  
沈丁の挿し木に蕾友逝きぬ 早崎泰江  
居残りの夜の白雲沈丁花 井上石動  
咲き初めの傷みなき白沈丁花 齊藤裕子  
暮れ方の雨は細しや沈丁花 井上石動  
ドア押して暗きの中よ沈丁花 井上石動  
沈丁花香いっばい日曜日 秋川 泉  
沈丁の香り漂ふ墓の道 長崎桂子



沈丁の花のうら側色異に 佐藤喜孝  
医院まで道のり近し沈丁花 田中藤穂

目に鮮やかなミモザの黄は捨てがたい。ミモザといふ響きも魅力的。何語だらう。

大空をミモザ蔽ひて屈託す 鎌倉喜久恵  
旧姓に戻りし人よミモザ咲く 須賀敏子  
ミモザ咲く夫に誘はれ道変へる 齊藤裕子  
ミモザ咲く家全体を黄に染めて 山莊慶子  
見に行かんミモザ咲けりと知らされて 早崎泰江  
ミモザ咲く只一行の日記今日 須賀敏子

ミモザ咲く昨日は今日を知らざりし 須賀敏子  
対談は佳境に入りぬ花ミモザ 田中藤穂  
低気圧去りてミモザの黄の深み 須賀敏子  
足止むる駅中花屋ミモザの黄 田中藤穂  
遠く来てニースの市場ミモザ咲く 須賀敏子  
一人ずつに今日といふ日よ花ミモザ 田中藤穂  
猫病めり窓辺にかかる花ミモザ 秋川 泉  
花ミモザ香る国際女性デー 赤座典子  
遠目にも黄の鮮やかにミモザ咲く 須賀敏子  
花粉症ミモザの大枝川にたれ 秋川 泉  
源氏講座次回はミモザの降る頃に 須賀敏子  
強さが好き輝きが好き花ミモザ 赤座典子

引き続き黄色い花を集めてみた。  
臘梅のごとくありたし一二月 須賀敏子  
臘梅にさほどの香あり春の風邪 堀内一郎  
臘梅のぼとりと落ちて星屑に 須賀敏子

臘梅や戦を避ける智慧在りや  
 和臘梅そけし芯の紅紫色  
 臘梅の匂ふ日だまりありにけり  
 息そそとはしり唐梅きぞの雨  
 臘梅の香りにしばし身をかがむ  
 北の友臘梅未だ見ぬといふ  
 草双紙唐梅に日のまはりきて  
 臘梅に見馴れぬ鳥のけふも寄る  
 臘梅の香りに目覚め母思ふ  
 臘梅にはや夕凍みのまつはれる  
 大き壺臘梅どさり寿司処  
 臘梅や壺は形見の唐津焼  
 臘梅は彼方ですよと手を翳す  
 蠟梅や次の休みに兄来ると  
 臘梅の山へ觀光馬車に乗る  
 臘梅のほのかにかをり友見舞ふ  
 臘梅や茶房店主の束ね髪  
 臘梅を差し上げたくて小枝切る

須賀敏子  
 赤座典子  
 芝 尚子  
 佐藤恭子  
 森山のりこ  
 須賀敏子  
 佐藤喜孝  
 森 理和  
 續木文子  
 竹内弘子  
 赤座典子  
 森 理和  
 須賀敏子  
 森 理和  
 田中藤穂  
 早崎泰江  
 田中藤穂  
 森 理和

臘梅や胡桃のパンの焼きあがり  
 臘梅の枝に恋々たる冬日  
 臘梅を突き抜けてゐる光かな  
 臘梅の百本の香や新名所  
 臘梅の朧たけた香の路地へ出づ  
 臘梅や紡錘の実を突出して  
 臘梅の秘めたる想ひ香に伝ふ石  
 臘梅や宝登山行の乗合馬車  
 床の間に臘梅やをら羽搏ける  
 臘梅を見にゆく馬車の動き出す  
 傳茶房臘梅はもう終りしか  
 臘梅や客多ければ香り立つ  
 臘梅の香は赤土の舞ふ中に  
 臘梅をすこしあるきて梅ひらく

須賀敏子  
 竹内弘子  
 篠田純子  
 須賀敏子  
 井上石動  
 赤座典子  
 森 理和  
 田中藤穂  
 赤座典子  
 田中藤穂  
 田中藤穂  
 須賀敏子  
 秋川 泉  
 佐藤竹僊



深夜放送ライン河畔の連翹説く  
 連翹の黄にはげまされ背をのぼす  
 連翹忌ほんとの青い空何処  
 することのなく日が暮れて連翹花  
 岐れ道連翹垣に沿ひこよと  
 智恵子抄またまた開く連翹忌

松本米子  
 鎌倉喜久恵  
 長崎桂子  
 定梶じよう  
 田中藤穂  
 長崎桂子

満作の花に近づきつとのぞく  
 咲き損じたるやうなりし満作は

東亜末  
 佐藤喜孝  
 森 理和

金縷梅に行き交ふ人のふりむかず  
 豊年満作はしごはくさびゆるびけり

芝宮須磨子  
 定梶じよう

山茱萸に人の流れの戻り来る  
 山茱萸の花の黄色に武甲山  
 山茱萸が目印なれや父祖の墓  
 晝の酒清雪のあり山茱萸あり

後藤志づ  
 須賀敏子  
 関口ゆき  
 佐藤喜孝

山茱萸の黄に静けさの満ちてをり  
 山茱萸の咲いて思はずひとりごと  
 山茱萸の花もじきねと早足で  
 おさげ髪山茱萸の花を日にかかげ  
 黄梅の咲いてゐるかと角曲る  
 山吹や尋ねたずねて登山道  
 山吹や句会ほこほこ横坐り  
 夕陽中散りて耀く濃山吹

赤座典子  
 須賀敏子  
 須賀敏子  
 秋川 泉  
 田中藤穂  
 森 理和  
 須賀敏子  
 阿部寒林



## あとがき

### 今月の表紙

梅の季節の、東京・春日の北野神社（通称「牛天神」、本堂の前に建つ、狛犬像の「阿」像です。文化年間に造られた像で、授乳をしたり、子どもをあやしたりしているのがユニークです。（撮影・不寝）

### 春蚓秋蛇

二〇一一年、この年の御題「葉」にちなんで傳句会の痕の新年会の座で書いていただいたと記憶してゐるが自信はない。しばらく続きますので楽しみてください。

### 季語あれこれ

今月の「季語あれこれ」は早春の黄色い花を探りあげた。何回か書いたが、お向かいさんの駐車場のスバルの奥にミモザの木がある。十月に越して来て、三月にこの木の黄色の花を見て嬉しくなった。ここを選んだのが運が付いてゐるなど喜んだ。この黄色い花の咲いてゐるのを偶然のやうに見つけた。少し驚く。三月を今年も迎えたなあと花を見る。私の通ふ図書館への何通りかの道順ある。家の角に二宮尊徳の石像が置かれてゐる。ここを曲がつて行くとミモザを発見した。ミモザの下からスマホを向けてゐると、もう一人私に声をか

けながらやはりスマホを取り出した。「季語あれこれ」採り上げた中に山茱萸がある。この木はミモザと違い大木になるやうだ。印象に残っているのは、高尾山麓の「うかい鳥山」で見た、見たと言うよりやはり親たと記憶にプリントされてゐる。新宿西武線の踏切を北から南に渡り坂を登り、信号を一つ越えると林がある。ここに喬い山茱萸が、松の緑を背景にあるのを見つけた。この樹木たちも翌年には、跡形もなく伐られて広い空き地が作られ……。山茱萸をしばし楽しみ、踏切を渡り、セメント工場の脇を通つて公園で一休み。スパーに寄り買物をして帰った。（喜孝）

二〇二五年三月号

発行日 三月十五日

発行所 〒177-0042

東京都練馬区下石神井一丁目六の三

サンハイツ石神井2 一階

電話 090 9828 4244

印刷・製本・レイアウト 竹僊房

カット／福井美佐子・ティリエイマ

会費 一五〇〇円（送料共）／一年

ゆうちょ銀行（普）（店番018）4586402

佐藤 喜孝（サトウ ヨシタカ）